



かもめ便り

社会福祉法人 小渦会 鳴門シーガル病院 理事長 高橋 徹
徳島県鳴門市瀬戸町堂浦字阿波井57番地 TEL. 088-688-0011(代)

記事紹介

- 90周年記念誌刊行 — 1面
- 小渦会 大運動会 — 2面
- 包括ケア推進室 新設 — 2面
- 職員研修会 — 3面
- 防災だより — 3面
- Dr.'sエッセイ — 4面

【ホームページ】 <http://k-seagull.jp/>

シーガル病院

検索



小渦会創立90周年記念誌刊行

創立90周年を記念して、このたび「小渦会創立90周年記念誌」を刊行致しました。記念誌刊行にご協力いただいた皆様には深くお礼申し上げます。

平成30年6月1日の創立記念日を迎え、新しく91年目がスタートしました。やがて迎える「創立百周年」に向けて、地域のみなさまのご協力をいただきながら、地域に根差した保健・医療・福祉の進展のため、よりいっそう力を尽くしてまいりたいと考えております。

小渦会 90年史編集委員会
豊田 守

地域とともに90年



阿波井神社

小鳴門海峡を望む鳴門島田島の南端に阿波井神社があります。古くから靈験あらたかな由緒ある神社として知られており、心の病の治癒を祈願して全国から参詣、参籠者が絶えず、地元等のご協力により、病院の前身となる施設が次々と新設されました。

昭和2年6月に阿波井島保養院が開院。その後、昭和10年に財団法人へ、昭和27年に社会福祉法人の認可を受け、現在の「社会福祉法人 小渦会」へと続いてまいりました。



全面改築前の病院(平成2年当時)

平成14年1月に病院名を「鳴門シーガル病院」に改称。

建物の全面改築も行い、第一期、第二期工事を経て平成15年7月に現在の建物が完成。精神科療養病棟(240床)として稼働を開始し、現在に至ります。



全面改築後の病院(現在)





5月12日(土)に小渦会春季運動会が開催されました。週間天気予報では雨の予報でしたが、参加者の皆さんの想いが届き、当日は運動会日和の晴天となりました。

各病棟の患者様のほか、小鳴門荘、いやしの杜クリニックデイケアの利用者様、瀬戸中学校の生徒さんなど、たくさんの方々にご参加頂き、運動場は熱気に包まれました。



競技では大玉ころがしや仲良し競争で地域の方々と患者の皆さんがふれあいを楽しんだり、大縄跳びや綱引きに老若男女が本気で汗を流して、楽しんでいました。

今年度から新競技としてTVでおなじみのキッキングスナイパーが登場しましたが、実際にやってみるとその難しさに大苦戦。風船割り借り物競争では、風船がなかなか割れなかったり借りる物を探すのに苦労したりしましたが、青空の下、参加者の笑い声が運動場一面に響いていました。

最後は徳島名物阿波踊りを輪になって踊ることで、みんなの心がひとつになり、笑顔があふれていました。

今年もケガ人が出ることなく、楽しい運動会になりました。

ご参加・ご協力いただいた皆様に感謝いたします。

作業療法士 東條 雅仁

シーガルニュース

包括ケア推進室の新設

地域と共に生きる 病院として



包括ケア推進室は、質の高い医療・福祉サービスの充実を通じて地域共生社会の実現を図るため、今年4月新たに設置され、地域連携室とともに地域共生部門として組織変更されました。

精神障がいに対応した地域包括ケアシステムの「地域の一員として安心して自分らしい暮らしをする」を基に様々なニーズに応えるよう、精神保健福祉士(PSW)、作業療法士(OTR)、看護師(NS)の専門職が配属され、職種を超えて協働しています。

入院から退院まで、そして、退院後、地域の中で安心して自分らしく生き生きと生活していくことができるよう、可能な限りお手伝いします。お悩みのこと、お困りのこと、些細なことでも遠慮なくお声かけいただき、

当事者や家族・地域の人が「相談してよかった」と思えるような関わりや支援を、切れ目なく提供できるように取り組んでまいります。

包括ケア推進室 大本 正子



(図：地域包括ケア研究会報告書より)

当法人では、社会の変遷に伴う様々な課題に対応できるスキルを身につけるため、外部の講師をお招きした職員の研修会を開催しています。

今回は5月21日（月）に、国立病院機構「四国こどもととなの医療センター」より児童精神科医長の中土井芳弘先生にお越しいただき、「子どもの精神科入院治療」をテーマに講演をしていただきました。



近年、当法人でも児童思春期の患者様の外来受診や入院が増えており、児童精神科を専門とされている先生のお話はとても有意義なものでした。



お話は多岐にわたり、少子化の時代においてもこころの不調を訴える子どもの人数は減っていないこと、子どもはストレスを大人のように言葉でうまく説明できないことなどを教えていただきました。

- 当院には現在児童思春期に特化した病棟などはありませんが、我々でも対応できることはたくさんあることなど教えていただき、これからの診療に活かしていきたいと考えています。

医師 田丸 麻衣



防災だより
災害時の通信手段の備え

自治体や公共の組織では、地震・事故・災害の情報を広く市民に配信する防災緊急速報メールのサービスを導入する動きが広がっています。

今では欲しい情報を手軽に携帯端末で受け取ることが当たり前となり、緊急時に求められる対応課題等も、速やかに、かつ的確に受信者の手元に届けられるため、災害時の情報伝達手段としても有効であると考えられます。

当院では、メールのほか、トランシーバーや衛星携帯電話を保有し、安否確認システムを活用した一斉送信メール等、それぞれの通信手段の特徴を生かして、複数の方法で通信環境を備え、機会あるごとに訓練を行っています。



< 衛星携帯電話訓練の様子 >



南海トラフを震源とする大規模災害の可能性が高まる中、食糧や燃料などの物資に加えて、「情報」も患者さん・職員を守るために必要不可欠なものであり、怠りない備えと訓練を行っていきたいと考えます。

防災担当 藤家 豊美



「付度」という言葉が話題になっている。偉い人の気持ちや意向を類推して汲み取ってそれに沿った行動を自発的にとることを意味するらしい。その前には「空気を読む」という言葉が一時はやっていた。この場合は自分の考えを押し殺して周りの大勢に同調した行動をとることを意味するようである。

しかし私が日常診療で接する患者さんはそういうことが苦手な人が多い気がする。

「付度」にしろ、「空気を読む」にしろ、他者を自分の中に投影した上でその人になりきった状態にて思考する必要がある。それは簡単そうに見えて実は案外難しいものである。特に自他の区別があいまいになっている精神病の人にはあまりできそうもない。そういうことができる能力は人間社会という名の海を上手く泳いで乗り切る必要のため、後天的に人間が授かった仕組みと考えるとよいのであろう。

しかし精神疾患を罹ってしまうと、後から発達したがゆえに脆弱なその機能が破綻をきたしてしまい、同時に社会の中での生きづらさを感じることに直面してしまう。一般に高次脳機能と呼ばれているものほど外界の変化に弱いものかもしれない。一方で常に「付度」を強いられる社会の中で流れに合わせて生きていくのも辛いものがある。

トーマス・エジソンは「付度」にも「空気を読む」ことにも幼いころから無縁の性格であり、通っていた学校に馴染むことができなかったが、彼の特性を理解してくれる母親が優しくエジソンに接してくれて彼の興味の芽を摘むことをしなかった。

付度できず、空気が読めない子供だからといって決して悲観する必要もないのであろう。

世の中で何が必要とされているのか、その流れをつかみ、独自の発想をして応用化することさえできれば人は偉大な発明家になれた。「損得」だけで動かない不器用な人間は逆に天才になれる可能性を秘めていることを教えられる。少しだけ救われた気持ちになれる、心地よい話である。

医師 澤田 和之

【編集後記】

日に日に日差しも強くなり暑さが増す今日この頃。体調を崩さないように早めの暑さ対策で、来る夏を迎え討ちましょう。

次号（かもめ便り16号）は9月に発行の予定です。

編集担当 武田

社会福祉法人 小渦会



鳴門シーガル病院 交通案内

- JR鳴門駅から「北泊・堂浦行」徳島バスで堂浦(どうのうら)下車(所要時間20分)

- 直営渡船利用 (所要時間2分)

◎ 渡船(無料) 運航時間

午前7時30分から午後5時20分まで

定時運航(10分～30分間隔)しています。

TEL088-688-0011(代)

